

信州の4大日本遺産 誘客・交流・活性化へ

課題や取り組み 情報共有

県内で日本遺産に認定される4文化財群に携わる観光協会や自治体、博物館など計18団体が構成し、茅野市のちの観光まちづくり推進機構（DMO）の熊谷晃専務理事（63）が会長を務める「信州4大日本遺産周遊促進協議会」は21日、「信州への誘客・交流、そして地域活性化につなげるために」などと題したフォーラムを松本市のキッセイ文化ホールで初めて開いた。約70人が参加し、各地域の課題や取り組みを情報共有したほか、文化庁職員などからアドバイスを受けた。

（平岡大輝）

周遊促進協が松本で初フォーラム

日本遺産は国内の文化や伝統をつなぐ有形・無形の文化財群を地域の風習や伝承を踏まえた「ストーリー」の下、パッケージ化して総合的に活用してもらおうと、2015年に開始した文化庁による認定制度。各地に点在する文化財群を「面」として発信することで地域活性化を図る。

県内では2月時点で▽月の都 千曲▽木曽路はすべて山の中▽レイラインがつながく「太陽と大地の聖地」▽星降る中部高地の縄文世界（山梨県含む）の計4件が認定されている。それぞれの遺産群が独自の魅力を持つ一方、

キッセイ文化ホールで開いた「信州4大日本遺産周遊促進協議会」のフォーラム



「（認定後）誘客や活性化になかなかつながらない悩みがあった」と熊谷会長。ちのDMOが21年秋ごろ、県内日本文化遺産地域を対象にヒアリング調査を実施したところ、いずれも同様の課題を抱えていることが分かったという。そうした背景から、各地域が連携して周遊の仕組みと受け入れ体制を構築しようと、同DMOを事務局として23年5月に同協議会を設立した。

これまでの2年間を通じて、県立歴史館の笹本正治特別館長の指導を仰ぎながら、遺産に関するストーリーの調査研究を行ったほか、観光コース策定やPR素材の作成を推進。昨年5月には3泊4日のモニターツアーを展開、同年9月に東京ビッグサイトで開いた「ツーリズムEXPOジャパン」に事務局が出展するなど魅力発信に向けた取り組みを続けている。

フォーラムの前には「日本遺産の魅力をいかに伝えるか」をテーマにガイド研修会も実施。県内日本遺産の「最

前線」でガイドを務める員やボランティアがその知見を共有した。

このうち、富士見町考古館の小松隆史館長がバスツアーに添乗員として行った経験を報告。「いい友達を（自分の）好所へ連れて行く感覚でやっている」「観光客の興味度合いに合わせたガイドを掛けている」などと話基調講演で登壇した立（文化拠点担当）の三木参事官補佐は「日本遺産ストーリーであり、必ずしも見えるわけではない。1ジウムやガイドを通して「可視化」し、その価値を付いてもらうことが重要」と助言。同協議会の今後動に期待を寄せた。